



唐木シノブ氏の手になるこのフォノ・イコライザーは、電源ユニットを独立させ、日本の古い伝統に則った外見に最新鋭の電子技術をくろみこみ、すばらしい解像度と使い勝手の良さを備えている。

レビュー：ニック・テイト 実測：ポール・ミラー

日本のハイファイ・メーカーがどれもそろってソニーや松下のような巨大企業というわけではない。見る目があって、懐に余裕のある少数の人びとに向けて、いささか癖はあるにしても面白い製品を作っている小規模な専門会社もそれなりの数がある。たとえばオーロラサウンド株式会社だ。テキサス・インスツルメント日本法人に 28 年間勤め、その傍ら音楽をみずから演奏し、現在、唐木氏はオーディオ機器を設計製造することに専念している。その母国ではアナログ関連製品が売れているが、そこへ唐木氏が新たに投入したのがヴァイニル・ディスク・アンプ (VIDA) だ。日本こそはアナログ復活を熱狂的に迎えた最初の国に数えられる。

## 新時代と旧時代が出逢うところ

一見したところ、VIDA はまるで生まれる時代をまちがえてしまったように見える。60 年代後半を思わせるスタイルは、レーベンの真空管アンプの横にならべても場違いではない。どちらも似たような古さを感じさせる。ところが内部を覗いてみれば、そこにあるのは三菱の最新型電気自動車も顔負けの、最先端の回路設計なのだ。精密な配線の流れがとり囲んでいる基盤には、メーカーが「精選した」ディスクリート・コンポーネントがぎっしり詰まっている。

もう一つ、もっと気になるものがある。回路基盤の上の、特注の小さなレンダーール・チョーク (メーカーは「フィルター・コイル」と呼ぶ) がわかるだろうか。これがあるからこそ、全体の設計、革新的な LCR 型 RIAA イコライゼーション回路構成ができるのだ。すなわち「世界初のディスクリート半導体を用いた LCR フォノ・イコライザー」と唐木氏が呼ぶ本製品が生まれたのは、まさにこの部品のおかげだ。当然のことながら、フロントパネルには MC/MM タイプ、インピーダンスの高低それぞれの切替えのためのスイッチを備える。さらにはオレンジ色のバックライトが点いてかなり目立つ大きめのミュート・スイッチもあって、これはまたたいへんに便利だ。他にもステレオとモノラルの切替スイッチとサブソニック・フィルターのオン・オフ・スイッチがあるのもうれしい。オーロラサウンドによれば、各種切り替えには密閉型小型信号リレーを採用し信頼性と安定性を確保している。入力、出力 RCA 端子には耐久性の高いロジウムメッキを採用し微小信号の流れを確実にサポートする。信号経路も最短。面白いことに、カートリッジの消磁機能までついている。古手のピックアップを使っているユーザーには利用価値が高い。

VIDA は実は二つのボックスからなる。メイン・ユニットは木製キャビネットに収められ、それとは別にオール・アルミ製の小型電源ユニットがつく。電源ユニットの中には、トロイダル・トランスとショットキーバリアダイオードが収められている。どちらも仕上げはすばらしい。とりわけメイン・ユニットのキャビネットだ。それにしても、ここまで読んでそろそろ欲しくなってきた読者は訊ねるかもしれない。この二つはどうしてここまで外観が違うのか。メイン・ユニットは前世紀の遺物のようだし、電源ユニットの方は、最新型のコード製 DAC に合わせてデザインしたと言われてもなるほどと思ってしまうだろう。まったくもってここまで違うのもめずらしい。

### **色付けがなく、細部の綾まで聞こえる**

試聴する前に、筆者のリファレンス・システムにつなぎ、たっぷり時間をとって鳴らしこんだ。このシステムの構成はミッチェルのジャイロデック・ターンテーブル、SME シリーズ V トーンアームとリラのデロス、それにヴァン・デン・ハルのフロッグ MC カートリッジだ。MM カートリッジでのパフォーマンスをみるために、ゴールドリング 2500 を用意した。アンプはソリッドステートがサグデンのご好意で IA4、真空管はカノアー TP134 プリメイン。スピーカーは スペンドール D7 である。

フォノ・イコライザーはどれもこれも極端に傾く。一方の極では、10 のマイナス n 乗の次元まで腑分けをするように、ミックスの一番底の奥深くまでレーザーで照らしだす一方で、音楽の全体像はどこかにふっとぼしてしまふ。さもなければ、人工甘味料を窒息しそうなほど流しこんで味付けし、音をセピア色に染めてしまふ。このどちらかしかなかった。オーロラサウンドはどちらでもない。最終的に出てくる音がどうなるかは、録音エンジニアあるいはプロデューサー、あるいはその両方にまかせるのである。そこで聞こえるのは、ごく自然でニュアンスに富んだ音楽演奏だ。

どんな音でも同じスタジオで録音されたように聞かせるのがフォノ・イコライザーの通例なのだが、VIDA はそのたぐいのことは一切しない。VIDA はそれぞれのレコードにそれぞれの個性を十二分に発揮させる。その一方で、VIDA そのものが存在を主張することはあくまでも拒む。ノイズや音のざらつきなどは皆無だ。試しにテクノをかけてみよう。《AMBIENT HOUSE, THE COLLECTION》 [DFC, BCM 422LP] から Morenas の〈Hazme Sonar〉だ。なまめかしいまでの深みと広がりこそなえたエレクトロニクス音が、サウンドステージにあふれかえる。

再生される音場の大きさは比べるものがないほどで、(高く評価されている) ライヴァル機もこれにくらべれば狭苦しく感じるほどだ。しかもその音場の大きさを確保するために、古い真空管フォノ・イコライザーがよくやるように、口当たりの良い音にすることもない。リスナーは VIDA のつくる広くて、同じくらい深くてくっきりとした三次元空間に自然に引きこまれ、包みこまれる。

もう一つ感心させられるのは、その色調だ。真空管フォノ・イコライザーには似ても似つかないが、ほとんどのソリッドステートのものとも気味悪いほど違っている。甘味たっぷりだがすぐに飽きる真空管のウォームさはかけらもないし、多少とも質の劣るソリッドステート回路につきものの、クロムめっきしたようなきんぴかの高めの中域も無い。この製品は「第三の」独自の道を行くので、しかも驚くほど無色透明なのだ。チック・コリアの《リターン・トゥ・フォーエヴァー》 [ECM 1022 ST] に針を落としてみよう。すると VIDA はレコードの溝とリスナーの耳小骨を直接結びつけ、古典的なこのジャズ・レコードから生々しい音楽を届けてくれる。

### **何も引かず**

中域は一点のしみもないほどクリアだが、人畜無害に殺菌されているわけでもない。VIDA の音は自然でムラがなく、それがタイトで無駄のないベースにまでおよんで、低域のコントロールも完璧だ。強調すべきところではきちんと強調される

が、やりすぎることはけっしてない。高域では明るく、広々として、伸びやかだが、ざらついたり派手になりすぎることもまるで無い。チック・コリアの録音でのシンバルには耳からウロコが落ちた。ドラマーの微妙なフレー징が手にとるようわかるのに、その音調はすばらしく洗練されて聞こえる。

そしてもう一つ大事なこと。VIDA の音は「全体でひとつ」なのだ。再生過程で音楽の躍動感が失われていない。ザ・スミスの《STRANGeways HERE WE COME》 [Rough Trade Rough106] 収録の〈Girlfriend In A Coma〉 を聴けばあらためてわかる。このフォノ・イコライザーのもつあらゆる長所は、すばらしく無色透明の中域を土台にしているのだ。ヘタなハードウェアで聴けば、濁ってぼやけ、平面的になってもおかしくない録音が、驚くほど奥深くまではっきりと聞こえる。

さらにうれしいことに、高域と低域はどちらも完璧な中域を楽々追随し、中域と完璧にタイミングを合わせてリズムを刻む。その結果、すばらしくまとまりがよく、押しつけがましくもない、楽しい音楽体験ができる。VIDA の音は隅々まで見透しがよいが、そのスピードはわざとエッジを立てて作っているのではない。

以上をまとめれば、堂々たるものである。チック・コリアのフェンダー・ローズ・エレクトリック・ピアノからは豊かな倍音がほどよくたちのぼる。クルセイダース《STREET LIFE》 [MCA MCF3008] の〈My Lady〉でのサックスのリードの響きの生々しさは、こんな音を家で聴いたことはないほどだ。とはいえ、保存のよいクラシックのLPをかけたときの、リスニング・ルームが消えてしまう体験は忘れられなくなるはずだ。オーロラサウンドがみせるどこまでもクリアな音とノイズが皆無であることに加えて、このめざましい深さと広がりをおくと、身動きもできない。ダンディン・コンソートによるヘンデルの《メサイア》はまるでライブを聴いているようで、散々聞きふるした盤面が最後にプチプチいいはじめるまで、自分がレコードを聴いていることを完全に忘れていた。

## MM ではどうか

カートリッジをゴールドリング 2500MM に替えても、若干出力が低くなるだけで、結果は同じ水準を保つ。細かいところもしっかり描き、エネルギーを湧きたたせながら、よりおとなしいこのピックアップに可能なかぎりの、洗練された音を聞かせる。スタジアム級の広大なサウンドステージにはやはり驚かされるが、それほどの深みはないのはゴールドリング・カートリッジの限界だろう。

それでも Gary's Gang の 12 インチ・シングル〈Keep On Dancing〉 [SAM Records 23-10885] をかければ、VIDAのおかげでタイトル通り踊りつづけてしまった。このトラックのシンセ・ベースをVIDAがコントロールする様は驚くべきもので、周波数限界以下にまで沈みこむかと思えるし、微妙な重みの表現も絶妙だ。

ここまで磨きぬかれた製品には欠点はほとんどないから、無理にやろうとすればケチをつけるしかない。だからこれから述べることは単純に事実を述べているととらえていただきたい。偉大なハイエンド製品は妥協せずに設計されている。録音がまずいとか、組込まれたシステムのバランスがとれていないことはまったく考慮に入れられていない。だから、お世辞を言ってくれたり、だまくらかしてくれたりするフォノ・イコライザーを求める向きは他をあたった方がいい。

VIDA を組ませたからといって、凡庸なターンテーブルやバーゲン用にプレスしたレコードが、成人式を迎えたばかりの若者のようにうたうことはない。このオーロラサウンド製品はその点では現実主義者だし、愚か者をあたたかく見守るようなことはしない。だから、まずアナログのフロント・エンドとして相応に質の高いものが必要だ。その上で、VIDA の高域はなにもかもありありと浮かびあがらせるから、レコードの表面には傷ひとつ埃ひとつあってはならない。

というわけで、オーロラサウンド VIDA はアナログ界の小さな驚異だ。まるで紀元前生まれのような顔をして、中に詰めこまれた設計やテクノロジーがどれほどのものか、見ただけではまるでわからない。アナログがどれほどの可能性を秘めているか、あらためて確認させてもくれる。

## **HI-FI NEWS の判断**

典型的なまでに日本的で風変わりなこのアナログ製品は、まことに巧妙な設計で、鋭利な刃物でさばくように微に入り細を穿つと同時に、まことに音楽的な再生をする。ノイズの無いことは驚くほどで、アナログの溝に大きく広い窓を開きながら、その音は冷酷に腑分けするわけでもなく、甘くなりすぎることもない。VIDA はすでに日本で得ているのと同じくらい大きな支持を当地でも得ることになるだろう。

Sound Quality: 83%

## **測定室レポート**

パッシブ RIAA 回路を構成するには、とりわけ MC ピックアップ向けには特大のゲインを必要とすることを考えると、オーロラサウンドが高い感度と極小のノイズを両立させているのは賞賛に値する。MM 設定では VIDA のゲインは(47kohm/250pF 負荷時) +38.4dB で、これは「標準」の 5mV MM 入力に対して 416mV に相当する。この値は MM 用フォノ・イコライザーとしては他の機種より数 dB 低いが、現行のプリアンプを駆動するには十分だし、入力負荷マージンは余裕の 160mV、A-weighted 時 S/N 比は 80dB だ。MC 入力はプリ RIAA 入力段でさらに+25.8dB 上乘せし、計+64.2dB のゲインを実現している。出力 0.61mV の MC が VIDA で 1V まで増幅されるわけで、低出力の MC カートリッジでも良い効果が得られる。A-weighted 時 S/N 比 76dB もひじょうに良いが、9mV の負荷マージンは MM 段に比べるとそれほど余裕はなく、高出力 MC の使用はできない。

歪率の低さは驚異的で、1V 出力時 20Hz--20KHz で 0.01%以下、中音域全体で 0.005%まで下がる(下のグラフ 2 参照)。これに匹敵するカートリッジは存在せず、VIDA は THD の観点からは事実上完全に「透明」である。イコライゼーション反応もやはりまったくのニュートラルで、+0.2dB/20Hz から -0.4dB/20KHz、振動としては感じられる超音波域のロールオフは -15dB/100KHz に達する。DC 回路による出力段の極低音域への伸びもこれ以上ないほどで、5Hz--20Hz の可聴領域下で +0.2dB のわずかな上昇がある。サブソニック・フィルターはレコードの反りに有効で、15Hz で -5dB と軽く絞るものだ(下のグラフ 1 参照)。唯一残念なのが 1.1kohm という高い出カインピーダンスである。www.hifinews.co.uk で赤い 'Download' ボタンをクリックすれば、オーロラサウンド VIDA フォノ・イコライザー・アンプの QC スイート・テスト・レポートを見られる。

## **アナログに注ぐ日本の情熱**

日本は逆説に満ちた国だが、アナログ LP との関係もまたその一つだ。日本は地球上でも最も新しもの好きのテクノロジーにとり憑かれた国のひとつだ。戦後の経済成長をささえたのは、ソリッドステート・エレクトロニクスとマイクロプロセッサの勃興である。一方で日本はまた伝統を尊重する国でもあり、熟練職人による精巧な工作をよろこぶ国でもある。CD が登場した時、日本は世界に先駆けてこれを導入した。とはいえ、人口も多く、それに伴いオーディオ市場も大きかったから、アナログも完全に消滅したことはなかった。90 年代はじめまでには、ジャズの巨大な人気と CD の音質に対する一部の不満から、アナログが復興する。まずはじめにブルーノート・ジャパンとインパルスが古典作品のアナログを再発しはじめた。その後に一連の再発が続き、やがてビートルズとレッド・ツェッペリンにおよんだ。1995 年までにはマニア向けに限られたものとはいえ、アナログは再び最先端となった。オーディオ・テクニカやデノンからリラ、光悦にいたるカートリッジ・メーカーは利益をあげはじめた。以来、市場は拡大する一方である。

以上